

# 漢詩神奈川

第12号

神奈川県漢詩連盟  
事務局

横浜市栄区笠間  
5-3-2-103

TEL-FAX  
045-895-2662

発行人 岡崎 満義  
編集人 桜庭 慎吾

## 漢詩の仲間を増やし、会員の拡大を図ろう

### — 神奈川県漢詩連盟総会開かる —



岡崎 満義 会長

(壇上垂れ幕は上田尤子会員の書)

神奈川県漢詩連盟の第七回総会が、さる五月二十二日、神奈川近代文学館において開催され、雨天にも拘らず百名の参加者で和やか且つ家族的な雰囲気の中でとり行なわれた。

総会に先立ち、故中山清氏への黙祷を行い、続いて岡崎会長が議長席に着かれ、桜庭事務局長の司会により議事が進められた。

岡崎会長の挨拶・審議・各報告・意見交換・質疑応答のあと、表彰・講演(石川忠久先生)、その後場所を隣のポートヒルホテルに移し懇親会(五十名参加)を行った。

当初初めての企画として、漢詩書籍(古書)の即売会が会場の隣室で実施された。事前に目録を配布したこと、価格が大幅安ということもあり大好評でたちまち完売した。これは会員の大本 久氏が貴重な蔵書124冊+αを県連に寄贈して頂いたことによるものです。そのご好意に感謝の意を表します。売上金は県連の財源として有効に活用させて頂きます。

総会の要旨は、会長挨拶・報告等を纏めると以下の通りである。

#### 一、会長挨拶

まず県連の活動で最も力を入れていることは、会員の増強と世間一般の人々へ漢詩の面白さを知って貰う事であり、そのために次のことを実施してきた。

#### ☆「初心者入門講座(第六期生)」

今年も四月から六月にかけて六回の講習により、漢詩を作ることが出来る人を育てている。全体講義と少人数寺子屋方式の組み合わせによる指導が特色で分かり易い講座を心がけている。

今回の受講者は過去最高の三十九名と盛況であるがこれは会員のさまざまな努力によるところ大である。

#### ☆「県漢連ホームページの立ち上げ」

四月一日に完成した。その内容は豊富であり他のそれと比較しても群を抜くものと言える。第五期生の飯島敏雄氏の精力的な注力による成果であり、県連への貢献大なりとして、総会当日、氏を表彰して感謝の意を表した。

#### ☆「地元新聞に漢詩欄が連載さる」

四月二十九日(日)に岡崎会長の「漢詩への誘い」が初めて神奈川新聞に載った。今後、第五日曜日に計三回載る予定。これは岡崎会長のマスコミへの粘り強い工作の結果、実を結んだもので六百字の紙面枠をようやく頂くことが出来たもの

で会長としては、何とか月一回の掲載を目指して今後も新聞社へ働きかけてゆきたいと語っている。

☆「詩吟の会への漢詩講座」

岳精流日本吟院の横山精真氏の要請により昨年十一月以来、門下の希望者二十五名の生徒に対し、漢詩の作り方の講義を十回の予定で実施中。

県連から会長以下五から六名の講師が吟社へ出前出張して少人数に分かれて学習を行っている。

☆「吟詠会での漢詩鑑賞会」

三上光敏氏(県連執行理事)主催の湘清吟詠会の要請により、岡崎会長が「酒とユーモア」のテーマで講演、六十五名の参加者であった。

☆「大学同窓会での漢詩の話」

横浜市立大学同窓会より県連に依頼があり、これも岡崎会長が漢詩の鑑賞について講演をした。四十数名が参加。

この様な活動の積み重ねによって、県連の会員数は現在百八十八名まで増加しており、今年度中には二百名に達するものと思われる。

この他、朝日カルチャー湘南(藤沢ルミネプラザ)において、七月二十一日より「はじめての漢詩作り」の講座が開設され、古田光子氏(県連理事)が講師に推挙されています。奮って、参加下さい。

他県連との交流会は今まで、栃木県・東京都と各々行ってきたが、これからも近隣県とは史

跡めぐりなども含めて広く交流を深めてゆきたいと考えている。

二、二十三年度決算及び二十四年度予算

二十三年度会計報告・監査報告及び二十四年度予算案が提案され、全員一致で承認された。(内容は13頁下段参照)

三、規約の一部改定

県連の規約の一部改定が付議・承認され、左記のように運営委員の位置付けが明確化された。「」内が新規。

イ、第五条(役員)の項

「運営委員若干名を置く」

ロ、第六条(役員の選任)の項

「(五)運営委員は理事会の承認を経て会長が推薦し、総会で選任する」

ハ、第七条(役員)の任務の項

「(五)運営委員は執行理事会に出席し、審議に参加し会務を運営執行する」

ニ、第九条(総会および理事会)の項

総会は年一回会長が召集し、理事、「運営委員」、監事の選任、事業計画、事業報告、予算、決算の承認を行う

ホ、第十一条(事務局)の項

本会の事務局は「事務局長の自宅に」置く右記のように県連組織における運営委員の位置づけとその機能が明確化された。総会の場において、運営委員として、三村公二、吉岡昭夫、中島龍一、高津有二、室橋幸子、川上修己、飯島敏雄、土屋昇三の各氏が選任、承認さ

れた。

れた。

総会に引き続き、石川忠久先生の講演「杜甫の詩を味わう」があり、分かり易い軽妙な語り口で会場のみなさんは杜甫の詩の深い意味をたづねたりと味わうことが出来た。先生ご自身も杜甫が最も好きであると言われて、その理由も聞かせて頂くことが出来た。

その後、懇親会参加者は隣のポートヒルホテルに場所を移して、楽しく懇談し相互の親睦を深めた。司会の室橋さん・三村さんにより、スピーチ・余興と数多くの人がマイクを握り、日ごろの意見あり、吟詠あり、民謡ありで会場が盛り上がったところで更に、即興によって石川先生が、県連の古書販売の話をも漢詩に、窪寺先生が前日の首都圏では九百二十年ぶりの金環日食を漢詩にして披露されるなど、時を忘れるひとときであった。

「石川岳堂先生の玉詠」

賀神奈川県漢詩連盟第七回総会

絲 絲 細 雨 浥 薔 薇

七 次 會 同 初 夏 時

今 歲 重 加 新 樣 式

詩 書 滿 卓 賣 爲 資

「窪寺貫道先生の玉詠」

壬辰五月念一日望金環日食有感

素 魄 輾 來 侵 赤 烏

金 環 燦 燦 占 天 隅

四 圍 氣 冷 景 昏 暮

玄 妙 忽 思 人 世 愚

(桜庭記)

【平成二十四年度連盟運営方針】

運営委員制度規約化により活動の更なる拡充を

“寺小屋方式”の未来

会長 岡崎 満義

日本は今やスーパー少子高齢化時代を迎えようとしている。

どこにもお手本の無い、荒野を手探りで進んで行くしかないようだ。昨年の東日本大震災のあと、家族の絆、地域の絆を取り戻せ、との声があがった。しかし、考えてみれば、戦後の経済の高度成長はそういう絆を振り捨て、断ち切つて働いた結果、実現した豊かな社会なのである。つまり、親孝行する代わりに、会社孝行をして国民総生産も世界第二位となった。

今やデリバティブとかいう金融経済が実体経済を揺るがし、その実体経済もグローバル化や、非正規労働化が進んで会社孝行しようにも、まことにしにくい事態になりつつある。

日本国内にいても、会社では日本語ではなく、英語が社内公用語として使われる会社がでてきた。楽天やユニクロ、I.T産業だけではなく、この傾向はさらに他産業に広まってゆくだろう。そんな時代になぜ漢詩なのか。どんな時代になっても、「自立した人間」でな

ければならない。日本はスーパー少子高齢化時代、もつと正確に言えばスーパー少子高齢化単身者時代がやってくる。「自立した人間」でなければ生きてゆけない。といつて「自立した人間」が孤立しては始まらない。「自立した人間」が寄りかかり、じゃれあい、マザーリング(猿の毛づくろいのような)をし合うゆるやかな連帯つながりのある社会を、私はイメージする。それが新しい絆だと思う。

漢詩は自立の役に立ち、いま我々が進めている“寺小屋方式”は温か味のあるつながりになるのではないかと考えている。

県連の諸活動を進めるにあたって

事務局長 桜庭 慎吾

第七回の県連の総会において、昨年度の事業報告及び決算、本年度の事業計画及び予算についてご審議、ご承認をいただき本年度の事業が推進されることとなります。

今総会の特記事項として、運営委員制度の位置づけが明確化されたことあります。これにより県連の組織運営が一層機能的かつ効果的に実施されることが期待されます。

実質的には、昨年度より運営委員の活動はスタートしていましたが、今回の規約改定により名実共にその位置づけが明確になりました。今後は各プロジェクト担当の運営委員には、プロジェクト間の情報の共有化と連携に一段と意を砕き、県連としての総合力の発揮に尽くしていただきたいと思います。

このことが会員に対するきめ細やかな情報の提供と、各種サービスの提供等に繋がってゆくこととなります。

また理事各位におかれましては、主宰される吟社および書道会より本年度の初心者入門講座に多数の門下生をご紹介下さいました。これにより今年の初心者入門講座は盛況を得ることが出来ました。

また本年四月一日より県連のホームページが開設されたことも特筆されます。これは執行理事 三上光敏氏をチーフとするHP開設プロジェクトの活動が、就中、飯島敏雄氏による献身的尽力によるものであります。このHPの開設により、会員に対する情報の提供と会員の相互交流に寄与するところが大きいと期待されます。

今後はさらに工夫をこらすことにより、新規会員の拡大など、この基盤を活用して参りたいと思います。



【連盟の諸活動報告】

# 皆元気に頑張っています



## 盛況！ 初心者入門講座（六期生）

今年も初心者のための漢詩入門講座が行われている。新聞の募集記事、個人の紹介などにより三十九名(男二十五、女十四)の応募があり、四月五日より六回の授業を終えたところである。今後九月六日の補講および、十月三日にフォローアップの研修が予定されており、それまで自主勉強をして、七言絶句一首を発表して皆で講評、討議することになっている。皆さんの成長が楽しみである。

四月の一回目の講座では“漢詩とはどのようなものか”から始めて、韻・平仄などがあること、漢和辞典の使い方、自分の名前の平仄を確認、などから入った。しかし半数以上の生徒は難しい、分かり難いと感じて帰られたようでしたが、二回目に前回の復習をして繰り返し平仄というものの説明、一行詩七文字で意味を通す練習、などを経てやっと納得した。

そして、作り方は○●表示の一覧表の枠内に二字・二字・三字を当てはめるクロスワードパズルであると説明したところで、生徒一同大いに安心したようであった。

その後「誰にでもできる漢詩の作り方」をテ

キストにして二行詩を作り、起承転結を学習して絶句の作り方を学んだ。

六回目は卒業作品の発表を一人ずつ行い、先生方の指導により七言絶句をほぼ完成した。

講師陣は岡崎会長はじめ六〜七名を揃えて生徒との対話も十分であり、講義は前半は全体講義、後半は五〜六人に分かれて少人数指導をして、生徒の細かな疑問に答えながら進められたため、個人ごとの理解度に差が生じないという良さがあつた。このいわゆる、寺子屋方式は初心者への漢詩の指導には効果的であり不可欠のようである。

今年の生徒数が例年になく多かったのは、新聞広告(朝日・日経・神奈川)の効果の他、会員の先生(書・吟)の紹介が多いこと挙げられる。また応募者に対して事務局から個々に電話で講座の事前説明をしたこと一回目二回目の欠席者に対して教材を送付して来場時に事前の補講をするなどの対応策をとったことが出席率や定着率を上げることにつながったと思われる。

十月のフォローアップ研修を経て六期生の会の発足を期待すると共に多数の新人と漢詩作りの楽しさを共有してゆきたい。(中島記)

## 初心者入門講座・六期生に贈る

磯野 衛孝

県連の磯野理事が、今秋十月三日のフォローアップ研修会を目指している第六期生のためにと励ましの短歌を寄稿されました。

- 一 研修会 薔薇の花壇を 通り抜け  
辞書を片手に 詩壇に上がる
- 二 諸先輩 手取り足取り 三ヶ月  
嬉し恥かし 卒業漢詩
- 三 題を決め 起承転結 筋書きを  
まずは漢字に 置き換えてみる
- 四 漢詩人 詩は志と 言うけれど  
最初は風景 季節偶成
- 五 まず辞書と 使い始めの 詩語辞典  
三種の神器に あとは韻字表
- 六 詩語辞典 花鳥風月を 題として  
切ったり貼ったり 並び替えたり
- 七 詩後辞典 下二字を 拝借し  
上二字二字と 積み上げるもよし
- 八 下三字 日本人には 不得手なり  
先人の真似 語呂調子よし
- 九 起句承句韻は決まりて さて結句  
韻見つからず 迷路に入る
- 十 結句韻 迷った挙句に 別の韻  
起句と承句も 共に乗り換え
- 十一 正しくは 結句の韻を 先に決め  
後から決めよ 起句と承句と

- 十二 平仄は 後から直せること多し  
起承転結 これが肝心
- 十三 主語無くも それは他人かみずからか  
判る詩作り 読む人のため
- 十四 題材の 多すぎはこれ 飾り過ぎ  
潔く切れ 何かが見える
- 十五 秋来れば フォローアップの 研修会  
こわさ半分 楽しさ半分
- 十六 会長の 継続するに 意義があり  
「三多」に励めと これ守るだけ

### ホームページ 今後の取組み

平成二十四年四月一日予定通り、神奈川県漢詩連盟のホームページが立ち上がりました。今回の立ち上げは飯島敏雄氏と川上修己氏の献身的な努力の賜です。次の課題は運営を軌道に乗せ、「HPを見て入会の意思を固めました」と言ってくれる新会員が出てくるまで、質を高めお客さまに飽きずに見ていただくものにブラッシュアップすることだと思えます。知見から多いのはこの段階でHP完成と見做して立上げ後の努力を止めてしまうことだと考えます。努力しないと、「人の噂」?の期間が過ぎると静かに消え去る運命だと思つていきます。従つて完成は暫くお預けです。

さて、私たちのHPは現在のところ、残念ながら知名度が高くないためかお客様の累計数は千名に届いていません。魅力あるページとし

て、「見て満足 聞いて満足、リピーターとしても吹聴してくださるHP」にするためにはその新鮮さと魅力ある内容づくりを絶えず気にする必要があります。幸い会員の皆様は多才の持ち主の方が多いので心強く思つています。これからは皆さまのお知恵と労力を頂戴して企画を更に充実していきたいと考えています。

現実的には必要に応じて音声や動画などを掲載できるような技術的な準備を進める一方、漢詩を作る土壌を幅広く捉えて漢詩鑑賞をはじめ、自作漢詩の書や吟詠そして超初心者向けの作詩講座—例えば「毎月の作詩一口メモ」や、漢詩に関心のある方の漢詩作法相談(踏込む程度が課題だが)などよかれと思われることは可能な限り試行が必要と思つています。

新入会員発掘で神奈川方式として評価されていることと合わせて、HP開発・運用でも神奈川方式と言われるよう、そして会長が夢見る? お客様の爆発的な増加を実現してみたいものです。(三上記)

#### ホームページへのご案内

##### 方法1

検索エンジン(例えば「Yahoo! JAPAN」)から下記のホームページアドレスを入力(Enter)する。

<http://www.shinkanren.sakura.ne.jp>

##### 方法2

検索エンジンを使ってキーワード「神奈川漢詩連盟」で検索する。

### 漢詩鑑賞の集い「酒とユーモア」

岳光 三上光敏

四月八日(日)、三浦市南下浦市民センターにて湘清吟詠会の第一回漢詩鑑賞の集いが開催された。演題は「酒とユーモア」。講師は神奈川漢詩連盟会長 岡崎満義先生。参加は六十五名。参加者には手作り冊子のテキストと「漢詩神奈川」十一号・入会案内を配布。

講義は先ず絶滅危惧種と講師がいわれる漢詩世界の現状の紹介。次いで日本の最初の漢詩集「懐風藻」(七百五十一年)の編纂の位置付けや、訓読法の発明、続いて日本での漢詩の歴史。さらに現在の中国での古典詩作りの実情へと続く。そして教育界での特区制度にもふれられ、世田谷区の日本語特区の紹介。英語教育の大切さもさることながら、日本人として日本語教育の必要性を熱く語る。四月八日付「朝日俳壇」金子兜太選一席の作品「帰去来(かえりなんいざ)みちのおく春霞」での漢詩との繋がりにもふれられた。そして『神奈川方式』と石川忠久先生がいわれる神奈川漢詩連盟の漢詩作詩入門講座の紹介と、講師の漢詩への並々ならぬ身の入れ方が伝わってくる。さらに講師が京大で中国文学史を一年習った吉川幸次郎、井伏鱒二、青木正見等々の逸話と続く。

戦後、世の中の風景は2回変わったという展開に聴衆は完全に講師の手中。長島茂雄の「メイクドラマ」や「ミート・グッドバイ」など数々のエピソード

ソードに春眠を味わう人はいない。前半一時間に登場した人物数は四十名余。講師は頻りに「脱線して」と恐縮されたが会員は大満足。講師の幅広い人脈の一端をうかがい知ることができた。

後半は詩文をスクリーンに映しての漢詩の説明。于 武陵「勸酒」、高適「田家春望」そして賀知章「題袁氏別業」と進む。何れも井伏氏の訳文詩集つきで分り易い。杜甫「飲中八仙歌」での詩の誇張表現は「沈み込んでいる人に浮力を与える効果がある」という。そして杜甫と李白の友情の詩、「日本の文学は恋愛、中国のそれは友情」と説明される。さらに李白の「贈内」、「載老酒店」、「月下獨酌」、「贈汪倫」と続く。「贈汪倫」では石川忠久先生の近作にもふれられた。最後は詩吟界でもなじみ深い李白「山中與幽人對酌」。取りあげた詩は全部で十一首、二時間の興味の尽きない講演でした。

### 春の研修会 開く

城田 六郎

春の研修会は、六月十二日(Aグループ)と二十六日(Bグループ)に分かれて五十名の参加を得て実施した。前回から「詩を作る際の規則」九条を事前にお知らせした効果が現れて、平仄その他の間違いは半減している。

今回の研修会ではA・Bグループとも二十五名前後の参加者となり、時間の制約もあつて議論が十分に尽くされなかつたかと懸念される。秋の研修ではその点を十分留意してゆきたい。



投票によつて得点を競う方式は恒例どおりで、Aグループでは 大谷さんの作品を特選に選んだ人が四人もあり、群を抜いて一位となった。五期生の女性 横溝さんがそれに続いており、詩力の向上に眼を見張るものがあつた。Bグループでは、約過半数の人から票を得て三村さんが一位になった。なお、今回一位の方々には岡崎会長から奨励のためとして個人的な賞品が進呈された。各グループの一位作品は次の通りである。

夢裏奉送葦舟中山清先生 大谷 明史  
寂寂江邊午夢中 孤山吹下落花風  
葦汀遙望水天際 一點行舟向碧穹

廢屋薔薇 三村 公二  
無主荒庭雜草繁 薔薇半落傍頽垣  
搜紅粉蝶來還去 懷舊悽然獨倚門

### 詩書満卓賣爲資

— 寄贈本 好評裏に完売 —

大本 久会員からご寄贈があつた漢詩関係書の頒布会を神漢連總會と同じ日の五月二十二日の午前中に実施した。本は早く来られた方の順にお渡しすると予めアナウンスしていた事が影響したのか、十一時開場の一時間前の十時には既に十数名の方が並ばれ、会員の皆様方の関心の強さを感じさせられた。

大本様のご意思を活かし、できるだけ多くの方々のお役に立つようと、極めて廉価な設定にしたので、百二十四冊+αの寄贈本は予想以上の早さで、又、心配した本の奪い合いのようなトラブルもなく頒布開始一時間で完売した。日頃、高価で、且つ数も少なく手に入りにくい詩語集類、平仄辞典類や漢詩鑑賞本などに人氣が集中したようであつた。手に入れた本を大事そうに使つておられる人達を見ると、ご寄贈のご趣旨に多少でも沿う事が出来て、お役に立つたかなと思つている。

大本様には六月十二日の研修会席上で岡崎会長から感謝状と粗品をお贈りし、会員の皆様の感謝の気持ちをお伝えした。

尚、今回皆様から得た浄財は今後の連盟の活動費として使わせていただく予定である。(見出しの句は、2頁 石川先生の詩参照)

(三村記)

「大簡詩草」輪読会のこと

酒井謙太郎

夏聴雪博士七秩大慶詩

藻雅芬芬才不群 詩凌昌谷大名聞

国琛居邇人遐矣 百丈丹崖起景雲

大簡詩草の中の一詩である。一読し詩意が判る人はかなり漢籍の素養のある人である。

大簡こと阿藤伯海、岡山の人。若き日に西欧浪漫主義の詩に傾倒し、東大で西洋哲学、更に京大で中国古典学を学ぶ。一高で教鞭を執るも戦時中に郷里に隠棲。名利に恬淡とし漢学に耽溺し、孤高の生涯を終えた漢詩人。

彼の遺稿「大簡詩草」を輪読しようとして、十名の有志が平成二十二年七月から毎月第二金曜午後一時に集まり、侃々諤々の議論を重ねることになった。

仮名がぜんぜん無く漢字ばかりの本。フランスの唯美的な高踏派を思わせる幻想的な詩や平明な抒情詩もあるが、冒頭に挙げたような典故や難解な漢語の表現の詩が多く、相当の下調べがないと歯が立たない。

毎回夕方まで解釈や鑑賞をめくり、討議に夢中になるのだから、この会のメンバーも相当に「物好き」な連中である。

3・11は神奈川近代文学館で討議中であった。当日帰宅困難者も出たが、これ位でこたえられるような連中でない。休むことなく続き今年の四月に読了した。

「難しい」といぼしつつも続いたのは、他で味わえない奥行きのある深い詩想や繊細な表現がこの詩集にあり、惹かれたからだと思う。

会の終了のあと中華街での酒食も、話題は漢詩文に関係のある事が殆どで、これだけ「物好き」な連中が居る限り神奈川の文運の隆盛はずいぶん違いないであろう。

本年五月から「佩文齋詠物詩選」の輪読に移った。清の康熙帝勅選の有名な古典。

最後に大簡詩草でかなり討議が紛糾した詩を挙げておく。皆さんはどう解釈しますか。

無題

一家孤命国孤道 仇偶儻然出草茅

海内驚看日方蝕 僻消天譴奈紛淆

【秋の吟行会】

「本日天気晴朗ナレドモ浪高シ」

戦艦「三笠」に乗艦して

「坂の上の雲」の世界に浸ろう！

秋の吟行会は、来る九月二十五日(火) 横須賀三笠公園中央広場の記念艦「三笠」に乗艦・見学をメインイベントとして実施される。

三笠公園は「日本都市公園100選」、「日本の歴史公園100選」に選ばれており、テーマは「水と光と音」であるが、何といつても見所は記念艦「三笠」である。先年、テレビ放映された「坂の上の雲」にも登場し、撮影ロケ地になった

ことは記憶に新しい。

明治三十八年の日本海海戦では、ロシアのバルチック艦隊を対馬沖で待ち構え、集中砲火を浴びながら勇敢に戦い、海戦史上例を見ない圧倒的勝利を収めたが、「三笠」艦内は当時のままに復元され、海事に関する数多くの資料も展示されている。

歴史上のモニュメントを目の当たりにしながら、丁度百年ほど前の我が国に思いを馳せ、一句案ずるのも一興かと存じます。

多くの皆様のご参加をお待ちしています。

(吟行会の詳細は、二十四年度後半のスケジュール表を参照下さい) (高津記)



【神奈川県漢詩連盟総会講演】

杜甫の詩を味わう

石川 忠久

毎年皆様の前でお話しするのを楽しみにしております。実は今年は丁度杜甫生誕千三百年になります。七百十二年生まれで今年は七十二歳ですから。

杜甫は何といつても最高の詩人です。最後は杜甫に行きつくのです。石川啄木、若くして死んだ歌人ですが、二十六才でなくなりました。彼の二十四才のときの日記を見ると、「矢張り白樂天は良いなあ」と、白樂天をほめている、暫くして、杜甫の詩集を買った。そして「矢張り杜甫だ。杜甫に較べると白樂天は問題じゃない」と云っている。二十四才の若僧がよくも云ったと思う。啄木の日記を見たのは比較的最近ですが、私は同じことを六十才になった時にやっと気がついた。私も少年の頃から漢詩にいろいろ親しんできましたが、最近は矢張り杜甫だと思ふ。

今皆さんは漢詩を作っておられるが、作詩にはルールがある。ルールはそれほど難しくないのだが、これが面倒臭くてやらないと云う人が居る。これは幾らやっても駄目。杜甫にはつながらない。つまり、ルールをきちんと守っていくと、グーと上に杜甫が見えてきます。逆に云うと、

今杜甫が生き返って皆さんの詩を見たとする、「ウン、これは下手だけど分かるよ」と云う筈です。出鱈目ををやっていたら、これは分からず、「四(詩)でも五でもない」という事になる。ルールはきちんと守って作り続けることが大切です。

そこで今日の本題に入ります。

杜甫は五十九才で亡くなった。昔は数え年です。今云えば五十八才と何ヶ月ということになるが、今の平均から云うと余り長くないように見える。しかし、当時の人生から見るとそこそこ生きている。人生七十古来稀なり、と



岳堂 石川 忠久 先生

云ったのは杜甫です。当時は七十才迄生きる人は珍しかった。案の定と言うべきか、本人も七十才迄は生きなかつた。しかし、五十九才でも当時としてはまあまあだった。この人生に彼には色々な浮き沈みがあつた。浮き沈みがあると云うことが詩人には大切なのです。天下泰平、具足円満だったら良い詩は出来ない。良い詩が生まれるように、天が詩人をそのように仕向けている。第一、あの秀才がしなかつた。どうしてか。このことについては私にも色々意見があるが、それはおいておいて、彼があのような秀才であり乍ら試験に合格しなかつたのは、天の配剤だと思ふ。もし合格していてトントン拍子に出世していたら杜甫ではなかつた。出世できないから、めげて、沈潜して鬱屈して、それで詩才を發揮できたと思ふ。

七百五十五年(安祿山の乱)があつたが、杜甫四十四才の年です。丁度人生の油の乗る時期に遭遇してしまつた。このタイミングも絶妙です。少年かもつと若い頃に出会っていたら別の人生だつたでしょう。もつと晩年、年を取つてからだつたら、又違つていた。丁度四十三〜四十四才と云う油の乗つた時期にあの大乱に出逢つたと云うことがこれが天の配剤なのです。その中で紆余曲折があつて、現在の四川省、昔の蜀の国に流れて、最後には夔州(きしゅう)、今の白帝城のある所、そこに二年居ました。五十四〜五十六才の時。この二年間にだーと芸術性が最高に達する。一つには晩年になり熟成したと云うことがあるが、もう一つは非常に大きな落差



を経験したのです。彼の人生の中でも時流に乗り、時めいた時があつた。皇帝の傍近くに侍つて、宮廷の一番奥深くで仕えた時があつた。位は高くないのだが、皇帝の傍に居なければならぬと云う職位、左拾遺と云います。落ちた物を拾うと云う意味で、皇帝といえども人間、だから失敗も落ち度もある。その為に、陛下、それは違います、と云う役目の臣下を置いておいた。役目はそうだが余り真面目にやつたのでは皇帝の機嫌を損じるから、黙っているのが普通だつた。併し、杜甫は大真面目にとめてしくじつた。世渡り下手だつた。お蔭で詩が上手になつた。少しの間であつたが、皇帝の傍近くに侍つた。このことが彼の心中にある。

五十四才の頃に居た所はモモンガーくらいしか住まない所だつた。その頃は文化果つる所で、住民が漢民族と違う恰好をしている。所謂少数民族ですネ。女性が働いて、男性は働かない。都人の杜甫はその違いを見て驚いた。大変な峡谷で猿の音が聞こえて来る。都の皇帝の傍と云う高い所から、今居る蛮地とも云うべき低い所、すごい落差がある。この大きな落差が引き金になつた。それで、パーツと燃えて僅か二年間に430首も作つた。今、杜甫の詩は1500首残つていますが、その4分の1を二年間で作り上げた。五十四〜五十六才に最高燃焼して、杜甫芸術は完成するのです。死ぬ迄あと二年間ありますが、この最高レベルをずっと保ち続けて亡くなつた。こうした事を考えると、杜甫の人生は神様が仕組んだと云えます。

今日は杜甫の習作時代を中心にお話します。習作と云つてもプリントに掲げた作品の年齢は、最初の「壯遊」は五十五才の時の作。この時点で自分の若い頃を振り返つた作品です。次の「画鷹」は正に習作時代の作品。何才の作かは良く分からないのだが、本人の言う所では四十才になる頃に自分のそれ迄の作品を捨てたと云つてゐる。四十才になつて自分の作品が高みに達したと自覚し、それ迄の未熟なものを捨てた。捨てずに残したものが幾つかある。そのうちの一つです。従つて、若い頃の自信作と云える。次の「李北海に陪してー」も若い頃の作。これは李白の影響を受けてゐる。次の二つは安禄山の乱の始まる少し前の作品。最後の「哀江頭」は安禄山の乱の後の作。乱が興つて、彼はつかまつて軟禁された。その軟禁された時に作つた有名な作品です。四十六才の作です。今日はこれらの作品を見ることに致します。

まず、夔州に居て自分の若い頃を振り返つた長い作品の最初の部分を見ましょう。

壯遊

壯遊

往者十四五	往者 十四五
出遊翰墨場	出でて遊ぶ翰墨の場
斯文崔魏徒	斯文 崔魏の徒
以我似班揚	我を以て班揚に似たりとす
七齡思即壯	七齡 思は即ち壯に
開口詠鳳凰	口を開きて鳳凰を詠す
九齡書大字	九齡 大字を書し
有作成一囊	作有りて一囊を成す

性豪業嗜酒 性は豪にして業に酒を嗜み  
 嫉悪懷剛腸 悪を嫉んで剛腸を懐く  
 脱落小時輩 脱落す 小時の輩  
 結交皆老蒼 交わりを結ぶは皆老蒼たり  
 飲酣視八極 飲むこと酣にして八極を視れば  
 俗物多茫茫 俗物 多く茫茫たり

五十五才で杜甫の芸術が完成する。その時期に若い頃を振り返つたものだが、大変な字句です。

昔十四五才の頃出でて、翰は筆、墨はすみで、翰墨の場と云うのは今で云えば文学界。そういうサロンの交わりの場に居た。

その頃、崔氏とか魏氏とか文壇の長老が居た。その長老が私をほめて、後漢の班固や前漢の楊雄のようだと云つてくれた。班固は漢書を作つた。楊雄はそれより先輩。誰でもが知っているこの二人に似ていると云つてくれた。大変な字句ですネ。この四行で一寸切れる。

七才で詩の思は壯んであり、口を開いて目出度い鳥の鳳凰を詠んだ。九才では大きな字を書き、詩を書いてためておく袋が一杯になつた。ここで一寸切れる。

性格は豪快で既に酒を嗜んだ。少し早い。今なら法律にひっかかる。しかもいっぱし大人の仲間に入つていたから酒も飲んだと。悪を嫉んで云々は、詩を作ることは直接関係はないけれども彼が五十五才で自分の人生を振り返つて、自分は世渡りが下手だつたと良く分かつてゐるので、それは悪を嫉んで剛腸をいいたが為。

左拾遺時代に將軍の人事に口出しをした。將軍と云えば高い地位の人。戦争に敗けたが高齡でよれよれだった。敗軍の將は死刑か位剥奪。その処置を見るに見かねて「あまりでございませ」と口を出した。これは越権行為です。これがしくじりの経緯です。剛腸を懐くとは良く云ったものですね。

子供の頃の仲間はまだ皆ぬけ落ちた。そういう仲間とはつき合わない。誰とつき合うか。交わりを結ぶのは老人賢者。ティーンエイジャーの頃からつき合いの相手はそう云う人々だった。酒をのんで見渡せば俗物ばかり多勢居る。

この作品は長いが、本人の若い頃からの気概が甘酸っぱく懐旧の情につつまれている。

では次は若い頃の自信作。何才の作かは不明だが、二十才代の作品でしょう。五言律詩です。対句の稽古をして律詩が作れるようになったら一人前です。律詩は五言の方が作り易い。七律は難しい。絶句は逆です。五絶は言葉が少なく足りないでなかなかうまく表現できないのです。七絶を作り、対句の稽古が出来たら五絶に進む。「画鷹」は五律はどう作るか。手本として最適の詩です。四十才になった杜甫が捨てなかつたのも良く分かります。

## 画鷹

素練風霜起

素練 風霜起(り)

蒼鷹画作殊

蒼鷹 画作殊(なり)

攫身思狡兔

身を攫(そび)か して狡兔を思い

側目似愁胡

目を側(そ)べて愁胡に似たり

條鏃光堪摘 條鏃(とうせき) 光 摘むに堪えたり  
軒楹勢可呼 軒楹(けんえい) 勢(いき) 呼ぶ可し  
何當擊凡鳥 何(なん)か当に凡鳥を撃ちて  
毛血灑平蕪 毛血 平蕪に灑ぐべき

素練はしろぎぬのカンバスです。そこに鷹の絵がある。しろぎぬに風や霜が起つたぞ。この詩のテーマは鷹は鷹でも絵に画いた鷹。しろぎぬに風が吹き、霜が降りたような雰囲気がただよっている。それは蒼鷹が画いてあるが、それがまことに素晴らしいからだ。画のつくりが非常に良い。蒼はただ青黒いと云うだけではなく、「蒼老」と前の詩で見たように、若い鷹ではなく、老練な鷹、蒼鷹と云っただけでこの鷹の目付きが分かってしまう。そういう雰囲気を含む字です。最初の聯で鷹は絵であつて、しろぎぬに画かれていて、それは並みの鷹ではないぞと云うことを表現している。

次の聯は面白い。先に見た鷹はどういう形をしているかと云うと、身をそびやかしている。それはこれから獲物を狙う前の姿勢。狡兔の狡はす速い。す速い兔を狙っているようである。兔は絵に画いてあるわけではないが、身をそびやかしている様子は、す速く逃げていく兔を狙っているかのようだ。目を側だてているその姿は愁胡に似ている。これは面白い表現です。愁胡と云うのは杜甫の発見ではなく、彼より前にこう云っている詩人が居るのだが、胡というのは西洋人。西洋人は目がひっこんでいる。鷹の眼が愁いを帯びた西洋人の眼に似ていると云う。中国の

西の方、今で云うシルクロードの辺にウイグル族などが住んでいるが、ウイグル族は顔付きが中国人と違う。その目がひっこんでいる様子を早く気が付いていた。それをここでも使っているのです。そばめる、と云うのは真つすぐ見るのではありません。鷹が横から鋭い眼で見ている、その眼がひっこんでいる。この二行の対句は素晴らしい。一つは今にも飛びかかろうとするその姿勢。もう一つはその眼が鋭い。

條鏃の條は真田紐のこと。鷹は自由に飛ばせないように紐でくくつてある。足に輪がついていて、その輪を鏃と云い、その輪を真田紐でつないでいる。中々に観察が細かい。鷹狩りをするために養っている鷹です。つまり木にとまる足に輪がついていて、それを真田紐で束縛している。その輪の光がまるでつまめるように見える。キラツと光っている風に画いてあるのでしょうか。それが手に取つてつまめるように見える。そして、軒楹、軒はのき、楹は柱。軒や楹にあつて、その勢いは呼ぶようだ。どういう情景かと云うと、これは絵であるが見る者がこちらで合図したら絵から飛び出して来るように見えると云っているのです。

何時になったら、平凡な鳥共の毛や血が平らな草原に満ちそそぐことであろうか。鷹が狩をするとき鳥を捉えてその毛が飛び散り、その血がぱつと流れる。そう云う場面を想像しているのです。これは絵の中ですから実際そこ迄画いているわけではないが、鷹が良く画けて迫真的であると云うことで、画き手をほめている。同

時にこれが大事なことだが、作者をほめているのであるが、我々読者は杜甫の気持ちを見る。この絵の鷹のように、何時か獲物を捉えるような、そう云う働きをしたいなアと云う気持ちだが、中に秘められている。絵の鷹を歌いつつ、自分の気持ちも籠めています。それが分かります。又これを拾った四十才の頃にしてみると、若い時と同様、こう云う気持ちがあつたのでしよう。これは捨てずに残した。見事な作品です。

しろぎぬに画かれた鷹をこのように表現した。これは絵で云うデッサンの確かさ。絵の稽古をする時にデッサンをしますネ。あるものを捕らえてその物の特色をどう見て絵にするか。詩作も絵と同じです。この稽古を積まないで、いきなり「野田内閣はけしからん」などという詩を作つては駄目です。うまく表現出来るわけがないので、こういう詩はもう少しデッサンの稽古を積んでからにしないと。初心の人は良くこうやりたがるが、絵と同様、詩もデッサン抜きでは上手になりません。だから「題詠が必要なのです。教場では先生が題を出し、生徒は題にあてはまる詩を作る。それをくり返す。これなくして進歩はありません。人によつてデッサンを早く仕上げても自由には作れるようになる人もあり、中々デッサンから抜けられない人もあるが、何れにせよ、この稽古を積んで行かないと上達しない。杜甫が良い例です。この詩は、こういう稽古をしている事を示している。韻は殊、胡、呼、蕪。音声的な調子は五言の場合にはトントン、トントントン。そして、偶数句末に韻を踏む。これが五

律です。日本の訓読で読むと、調子や韻のひびきが出来ませんから、補助として中国語で読むことも悪くない。しかし、くれぐれも云います、中国語をやらなければ漢詩は分からないと云う事ではありません。中国語が分からないくても漢詩は分かります。江戸時代の先人は皆そうだった。江戸時代は鎖国していたので中国人とはつき合っていない。中国語を知っている人は殆んど居ない。併し皆漢詩を自由自在に作つたではありませんか。だから中国語は前提ではない。いらないのだが、出来れば出来た方がよい。誤解しないで下さい。良く中国語が分からなければ漢詩は分からないと云う人が居るが、そんなことはない。そういうのは江戸の先人に対し失礼です。でも、詩としてのリズムは中国語で見る方がはつきり分かる。

(中略)

さて、最後の「哀江頭」これです。かれは安祿山の乱の時逃げ遅れて賊軍に捕まった。身分が低いから軟禁ですんだので、ちよろちよると脱け出して街を見ている。あの「春望」もそうして作つた。「国破れて山河あり」と、同じ時にこの「哀江頭」も作つた。この詩を作つて脱出する。決死の脱出を図つて成功する。新しい皇帝、玄宗の息子にほめられて、一躍お傍に侍ることになった。時めくこととなつてうまくやっていけば良かったものをしくじつたのです。その直前、乱が興つて捕えられて軟禁され、昔玄宗皇帝や

楊貴妃がここで遊んだ所へやつて来た。

哀江頭

江頭に哀しむ

少陵野老吞声哭 少陵の野老 声を吞んで哭し  
春日潜行曲江曲 春日 潜行す 曲江の曲  
江頭宮殿鎖千門 江頭の宮殿 千門を鎖し  
細柳新蒲為誰緑 細柳新蒲 誰が為にか緑なる  
憶昔霓旌下南苑 憶う昔 霓旌南苑に下りしとき  
苑中万物生顔色 苑中の万物 顔色を生ず  
昭陽殿裏第一人 昭陽殿裏 第一人  
同輦随君侍君側 輦を同じうし君に随ひ君側に侍す  
輦前才人帶弓箭 輦前の才人 弓箭を帯ひ  
白馬嚼嚙黃金勒 白馬嚼嚙す黄金の勒  
翻身向天仰射雲 身を翻し天に向いて仰いで雲を射る  
一箭正墜双飛翼 一箭 正に墜す双飛翼  
明眸皓齒今何在 明眸皓齒 今何くにか在る  
血汚遊魂歸不得 血は遊魂を汚して歸り得ず  
清渭東流劍閣深 清渭は東流し 劍閣は深し  
去住彼此無消息 去住 彼此 消息無し  
人生有情淚沾臆 人生情有り 涙臆を沾す  
江水江花豈終極 江水江花 豈に終に極まらんや  
黃昏胡騎塵滿城 黃昏 胡騎 塵城に滿つ  
欲往城南忘南北 城南に往んと欲して南北を忘るる  
自分のことを少陵の野老と云っている。少陵と云うのは都の南の郊外にある陵ですが、そこから杜の家が興つたので自分のことを杜少陵と云う。野老は田舎爺で自分のことを謙遜した。四十六才ですから爺です。大声で泣きたいが、大声ははばかられるので声を吞んで哭す。春日にこつそりとこの曲江のすみの所にやつて来

た。江頭の宮殿は皆門を鎖している。細い柳や、芽ぶいたばかりの蒲は一体誰の為に緑なのだろうか。

ここで一寸切れて、次は昔の思い出になる。霓旌は虹の御旗、天子の御旗がこの南の苑に下った時のことを憶いだすナア。苑の中の万物は皆生き生きと輝いたものであった。その御殿の中で第一のお方、他でもない楊貴妃です。天子と同じ輦に乗り天子様に随って天子様の側に侍っていた。どうですかこの云い方。ベタバタバタですネ。天子と楊貴妃の様子をこういう表現で表しています。ここで一寸切れる。尚、天子様と同じ輦に乗って行くのはみだりがましい事なのです。昔そういう故事があり、天子は独りで輦乗すべきなのです。何気ないようだが、この様子を皮肉っぽく詠っている。

才人と云うのは宮女の階級の名です。皇后から始まる序列の中等程度。兵で云えば佐官級です。それが選ばれて男装する。弓箭を身につけ白馬に乗っている。その馬が黄金のくつわをガチガチ云わせて勇み立つ。その男装の女官が身を翻して天に向かってしゅつと矢を射ると一矢で二羽の鳥が落ちて来た、と云う情景を回想場面として画いている。ここでちよつと切れる。飛ぶ鳥をも落とす勢いだつたと云うイメージをこう画いている。数ある回想すべき場面の中から杜甫はここを選んだ。この苑で催された遊びの中で、女官が武装し馬に乗り、矢を放って鳥を落とすと云う場面を画くことよつてかの太平の世を謳うと同時に出鱈目をしたと暗に

云う。こう云う処がセンスなのです。

その結果としてどうなったか。あの明るい眸、白い歯をしたお方、楊貴妃は今何処に居られるか。妃の流した血はさまよえる魂を汚して帰ることが出来ない。これは中国人がそう云う觀念を持っていることの表れです。殺されて遺骸がその地に埋められると、魂は帰れない。どんな遠くで亡くなつても遺骸を故郷へ運んで葬ると魂はそこに帰れる。併し楊貴妃の場合帰れない。ここで重要なのは「血が流れた」と表現されていることです。五十年後に白楽天が「長恨歌」を作ったが、楊貴妃は梨の木の下で絞首されたとしている。まだ一年も経つておらず生々しい。杜甫の方が真实性があると云えるでしょう。切られて血が流れた。そう云う魂はさ迷つて帰れない。清らかな渭水は東に流れていて劍閣山は深々とそびえている。渭水の側で楊貴妃は殺された。玄宗皇帝は劍閣山の方へ逃げて行つて、この詩を作った当時皇帝は劍閣山の向こうの蜀にまだ留まつている。去つた者と残つた者との間に消息はない。死んだ妃と生きている皇帝の間に消息はない。これは後の「長恨歌」のミソになっている処です。ここで一段落。

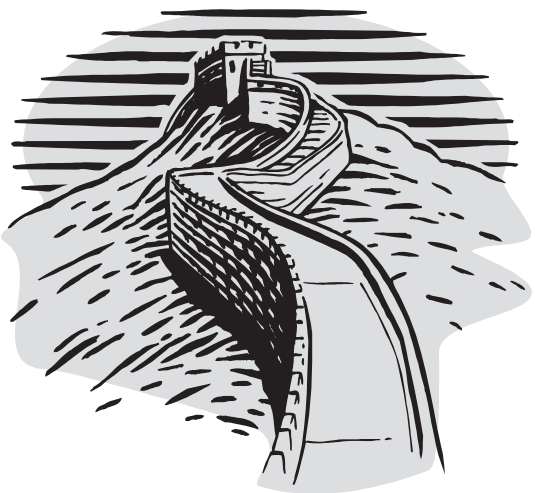
人生は友情、涙が出て仕方がない。しかし江水や江花はいつ極まることがあるだろうか、極まる時はない。河の水や河辺の花は毎年毎年同じに流れ、同じに咲く。併し、人生には有為転変があるのだ、と云う思いでポーツとしていると、早や黄昏だ。安祿山の兵隊が戻つて来て見つかつたら大變。城南に往こうとして、方向が

分からなくなつてしまった。あわてて帰らなくてはと云つて結んでいる。

この作品で、当時の様子が良く分かると同時に杜甫のセンスが良く出ている。ことに回想場面の表現、女官の男装を中心に、象徴的な表現が素晴らしい。一韻到底です。最初の四行と最後の四行は、一、二、四句に、真中の各四行は二、四句に踏んでいます。色々と技巧を凝らして、じっくりお話ししたい所ですが、本日はここ迄といたします。

(住田笛雄記)

(紙面の関係で、途中割愛いたしました。全文ご希望の方は編集事務局までご連絡下さい)



シリーズ 漢詩の話

漢詩と私

副会長 水城 まゆみ

私が漢詩を始めたのは、水戸の古文書解読会に入っていたことが契機になっています。古文書は漢文でできていることが多かったので、漢文と一緒に勉強しませんかと誘われ、その指導者の方が漢詩も作りなさいといわれ基礎から教えていただきました。

その後神奈川に戻ってきたので、ファックスでのご批評をしていただきました。

初めのころは詩語辞典も持っていないく、自分の頭で考えたものだったので今から考えるととても詩になっていないく、先生に早く上手になって下さいと言われたものでした。そのうち高価でしたが韻別詩礎集成や詩語辞典など揃えるうちに何とか詩らしいものが出来るようになってきましたがそこまで来るのに三年くらいかかったように思います。一緒に始めた友人は感が良くて初めから上手に作られていたので、早くそのようになりたいとも思っていました。そのうち二松詩文に入会し詩の会にも連れて行ってもらったとき、そこで窪寺先生や中山前会長にお会いする機会がありました。

一年くらいして横浜の朝日カルチャーセンターで窪寺先生の教室があることが判り、恐る恐る入会させていただき今日に至っています。皆さん清々しい立派な詩を作られて大いに勉強

になりました。中山前会長は行き帰りの方向が同じだったので、いろいろ漢詩の蘊奥についていつも教えていただき、いろいろな本も紹介してくださり大変詩の向上に資することが出来ました。初めから一緒に勉強している鷗盟も互いに批評し合って今でも麗澤の友として一緒に史跡を巡ったりして愉しんでいます。

漢詩は奥が深くて難しいのでいつまでたっても初心者域を出ないのですが、新しく入会された方がどんどん上手になって行かれるのを見ると、自分も頑張らなければと痛感するこの頃です。又先輩の上手な方を見ていると、いつも本を読んで勉強されています。やはり自分は勉強が足りないと感じています。

漢詩をやっているよかったですことは、いろいろな方の知遇を得て友人が増えたことです又最近チームを組んで漢詩作りのサポーターという仕事も増えてきました。熱心に取り組んでいる皆様を拝見すると嬉しくなります。一人でも多くの方が漢詩を趣味にされるようになることを願ってやみません。

私の好きな漢詩は 江馬細香詩集「湘夢遺稿」より「平等寺僑居偶題」を選びました

平等寺僑居偶題 江馬細香

閑身寂寞寓僧家 一帙唐詩一鼎茶

尽日春寒人不到 滿城風雨送梅花

(文政十年 細香四十一歳の頃の作)

★2頁に記載した決算・予算の内容は左記の通りです。  
(総会配付資料の内容を要約してあります)

収入			支出		
費目	24 予算	23 決算	費目	24 予算	23 決算
会員年会費	342,000	282,000	事務費	169,000	161,090
懇親会費	300,000	310,000	懇親会費	280,000	276,150
研修会参加費	46,000	46,000	各行事費	345,000	334,236
吟行会参加費	130,000	131,100	講師謝礼	60,000	80,000
サークル交流会	210,000	210,000	協賛金等	40,000	0
寄付金等	20,000	69,604	PR 活動費	30,000	0
詩集頒布代	10,000	64,320	振込料金	12,000	11,190
その他	2,400	2,400	臨時費・その他	20,000	165,458
合計	1,060,400	1,115,424	合計	956,000	1,208,124
24 年度 3 月末の連盟口座(ゆうちょ銀行)残高は 271,408 円					

【会員投稿欄】

前向き提案を待っています

伊藤竹外先生にお会いして

室橋 幸子

財団法人日本吟剣詩舞振興会の吟剣詩舞誌にかなり前から「吟詠家に漢詩のすすめ」という伊藤竹外先生の講座欄があり、私は時折り投稿していました。

四月末、突然、伊藤竹外先生から「東日本大震災漢詩集」という立派な本が届き、自分の拙作が掲載されていたのでビックリ。早速お礼状を書きました。

その十日程後、岡山の詩舞の大会に招待され出かけました。五千人満場の倉敷市民会館で、何と前席に伊藤竹外先生ご夫妻がいらっしやつたのです。大会後の懇親会で再び伊藤先生とお話させて頂く機会を得ました。先生は会場で、吟、舞を鑑賞しながら感想等を詩作されていたようで、その説明もありました。常々提唱していることは「現代を詠じ現代を吟じる」「震災を今詠まねば何時詠めるか」と呼びかけています。

私は倉敷への日帰り一人旅でしたが、伊藤竹外先生とお話させて頂いた事で、更に有意義で充実した一日となりました。

自詠自書にチャレンジしませんか

上田 尤子

私は長い間、書一筋に李白や杜甫の詩を借りて好きな書体で表現できるよう楽しんでまいりました。その後、窪寺先生やお仲間にも励まされて漢詩の勉強を始めましたが、漢詩には人生を詠み込み更に深さを表現するという書に似た感覚が有ることを知りました。嘗ての書家が屋漏痕や竹露の滴るのを見て自然の中から書の奥義を見つけた様に、自然と人間の繋がりがいかに大切かを奥深い漢詩の世界の入り口に立つて初めて実感しております。

最近では、自分が詠じた詩を書くという自詠自書を私なりに実践しておりますが、自分の詩の場合は、具体的な情景が目につかび感情移入がしやすく書の表現が豊かになります。このように、漢詩と書の欲張りな人生が現在の私の生きる力になり、原動力になっております。

神漢連が目指す漢詩普及の為には、書の世界の人達との繋がりをもっと密にしていこう、同様に、漢詩を軸に吟詠の人達との連携も又重要課題だと思っております。



九月六日〜九日に、日中友好会館で「日中友好自詠詩書交流展」が開催されます。石川岳堂・窪寺貫道・石川芳雲の諸先生方も出品されています。ご関心のおありの方は是非足を運び下さい。

瀛奎律髓

池上一利

先日神田の松雲堂で瀛奎律髓を購入した。上中下三巻の横本である。上巻の題簽が欠落し、処々虫喰いのある状態は必ずしも良好とはいえないが、価格も手頃で、長年探し求めていた本だったので即決した。

該書は元の方が編集した詩華集で、1283年序、唐宋二代の五七言の律詩を選び、四十九に分類した書である。

今回求めた物は方回の序と共に、文化乙丑(1805年)山本北山(信有)の序と下巻に大窪詩仏の跋が付いている。序によると、原書に付されている各詩の注や批評は削除し、詩の部分だけを記載した簡易版とある。

大漢和辞典を参照に目次(目録と書かれていた)をチェックしてみると、登覧類から傷悼類まで四十九類は網羅されている。五言、七言併せて二千九百四首が記載されているが、序文にも「精選の美」とある通り、原書の全詩を載せてはいないと思う。冒頭の登覧類を見ると、杜甫の「登岳陽樓」や崔顥の「登黃鶴樓」等が選ばれている。

ところで購入の動機であるが、迂生の詩の師でもある宮本大典先生の「咸亨庚辰集」に拠つたものである。難しい詩題や事物の形容を調べるときには「瀛奎律髓」や「佩文齋詠物詩選」に当たる、と書いてある。

後者は既に入手済みであり、何としても、この意志が前者にも通じたものと思われる。現代の書物の様に索引が完備されているわけでもなく、いささか難物の二書ではある。使いこなす自信は無いが、半歩でも先生の域に近づきたい思いで必死に頁を繰っている。

### 漢詩人伊藤春畝

岡崎勝郎

春畝は雅号で明治の元勳 伊藤博文その人。

幼名林利助。十歳で萩城下に住む足軽 伊藤武兵衛の養子となり、松下村塾で漢書・詩文・習字を学んだ。この頃伊藤俊輔と改名。

嘉永六年のペリー浦賀来航に続く動揺期を一長州藩士として働く。江戸勤番の折は、鎌倉の海岸防備の賦役もした。

彼が持ち前の才覚を表すのは、高杉晋作の指揮下長崎の武器買い付けの役を首尾よくこなしてからである。

慶應四年明治新政府揺籃、兵庫県令に任せられる、二十七歳。

#### 偶成

豪氣堂堂横大空 豪氣堂々大空に横はる

日東誰使帝威隆 日東誰か帝威をして隆んならしむ  
高樓傾盡三杯酒 高樓傾け尽くす三杯の酒  
天下英雄在眼中 天下の英雄は眼中に在り

十九年初代首相、二十五年日清戦争。三十年の日露戦争を前にしての作。

日露交渉將二断タントス  
四十餘年辛苦跡 四十余年辛苦の跡  
化為醉夢碧空飛 化して酔夢となつて碧空に飛ぶ  
人生何恨不如意 人生何ぞ恨まん意の如くならざるを  
興敗憑他一轉機 興敗は他の一轉機による

他の一轉機によるとは、先に三国干渉によつて清国に返還した遼東半島を凶らずも露国に収奪され、これを抑えるべく斡旋してくれるのは米国しかないとの意である。

公が大磯に滄浪閣を構えた頃、ここを詠った詩を相当残している。

#### 春寒

風雨春宵釀薄寒 風雨春宵薄寒を醸す  
群峰含雪入樓欄 群峰雪を含んで楼欄に入る  
忘機還醉滄浪閣 機を忘れてまた酔う滄浪閣  
不管浮鷗冷眼看 管せず浮鷗の冷眼に看るを

彼の晩年は朝鮮総監職を明治四十二年まで三年間務め、露国との友好条約締結の準備をすべく、露国高官との会見のため清国哈爾濱へ赴く。

十月二十五日奉天発して哈爾濱へ赴く

#### 汽車中の作

萬里平原南滿州 万里の平原南滿州

風光濶遠一天秋 風光濶遠一天の秋

當年戰跡留餘憤 當年の戰跡余憤を留め  
更使行人牽暗愁 更に行人をして暗愁を牽かしむ

これが春畝の最後の詩となつた。翌朝駅構内において露国儀仗兵を閲兵中に、数発の銃弾を受ける。六十九歳。

その人となりは、果断にして磊落奇倚の感があり、ここに挙げた四詩がそれを示してはいまいか。

### 入会案内

神奈川県漢詩連盟は本紙に掲載したような諸活動を行っている、漢詩を楽しむための会です。友人・知人にも是非入会をお勧め下さい。

#### ●会費

一般会員 年二千元

賛助会員 一口年一万元

#### ●初心者講座

毎年四月～六月に開催しており(月二回、計六回)受講料は二千元ですが、そのまま入会すれば受講料は初年度の年会費となる特典があります。

#### ●問合せ・申込先

\*電話・ファックス

045-895-2662(事務局局長桜庭宛)

\*ホームページ(→Eメール)

http://www.shinkanren.sakura.ne.jp

(→shinkanren@enail.plala.or.jp)

入会申込書がついています。

## 二十四年度後半のスケジュール カレンダーに予定を記入しましょう

### ● 吟行会

(7頁記事参照)

・日時 9月25日(火)

・集合場所 横須賀中央駅東口 午前10時

・目的地 横須賀三笠公園 記念艦「三笠」乗艦見学

・昼食及び懇親会 横須賀産業交流プラザ3F研修室13時～16時

・柏梁体 課題韻字による平仄不問の七言一句。任意提出ですが、懇親会で石川先生が秀作を選出します。

・参加費 3000円(昼食代、乗艦代)

・申込み 同封葉書にて8月末までに返信してください。

### ● 秋の研修会

従来と同じ「選句方式」で2～3グループに分けて実施します。

・時期 Aグループ10月9日(火)午後1時～5時

Bグループ10月24日(水)午後1時～5時

・場所 神奈川近代文学館2階会議室

・申込 同封葉書(吟行会と同書面)にて8月末までに、A/B

どちらかの希望日を記入して返信して下さい。

・詩稿提出先 〒259-1304 秦野市堀山下 600-9

水城 まゆみ 宛

・詩稿提出期限 9月21日(金)右宛先着厳守

### ☆ 編集後記 ☆

◆ 新体制になってやがて一年になる。連盟発足から五年間の実績を引き継ぎながらも色々と新しい企画が積極的に取り上げられるようになってきた。漢詩の普及／会員数の増強の為に外部との接点の強化が特に目に付く所である。ホームページの開設、詩吟世界の方々とのコラボレーション、新聞社その他マスコミへの働きかけ等々、地道な活動を続けている。何時の日か花咲き、実がなることを期待して見守っていこう。

◆ 連盟内の活動もこれと連動して、引き続き活発に色々な行事が行われているが、上記外部活動の影響もあって今年の新人(第6期生)は三十人強と過去最高で、お蔭で会員数も二百になろうとしている。

◆ 昨年は大震災／原発問題があり、それを取り上げた漢詩が多かったが、さすがに最近では少なくなった。ヨーロッパに端を発した不景気、消費増税を廻る政情不安など世の中は何かと騒がしいのに、又、金環食などの珍しい自然現象もあったのに、それらを詠んだ漢詩は極めて少ない。詩の題材にはなりにくく、且つ詩作に技量が必要という一面はあるが、漢詩の世界はこれでもいいのだろうか。

◆ 尚、紙面を読み易くするという目的で今回報印刷を外部に依頼した。後日、感想など編集者にお寄せいただきたい。

(中島・吉岡・三村記)